

平成 19 年 11 月 9 日

浜田市議会議長 牛 尾 昭 様

議員名： 平 石



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察を行ったので、その結果を報告します。

記

- 1、期 間 平成 19 年 11 月 5 日(月) ～ 11 月 7 日(水)。
- 3、視察地 (1) 北海道伊達市 11 月 5 日(月) 午後 3 時 00 分～5 時 00 分
内容 ① 伊達ウエルシーランド構想について
- (2) 北海道函館市 11 月 6 日(火) 午後 1 時 30 分～3 時 30 分
内容 ① 国際水産・海洋都市構想について

3、参加議員氏名

下隅	義征	三浦	美穂
山崎	晃	岡田	治夫
吉田	千昭	佐々木	豊治
平石	誠		

4、精算額 一人当たり 円

5、調査活動の概要

別紙のとおり

平成 19 年 11 月 26 日

浜田市議会議長 牛尾 昭 様

平成 19 年 会派（新生会、公明クラブ）視察報告書

下記のとおり、視察を行いましたので、その結果を報告いたします。

記

1. 日 時 平成 19 年 11 月 5 日（月）
～平成 19 年 11 月 7 日（水）
2. 視察先 北海道伊達市、函館市
3. 参加者 新生会 一下隅義征、吉田千昭、山崎 晃、岡田治夫
平石 誠
公明クラブ 三浦美穂、佐々木豊治

4. 調査の概要

北海道伊達市

◇市の概要について

伊達市は人口約 3 万 7 0 0 0 人。

北海道の南西部に位置し、年間を通じて温暖な気候に恵まれ、「北の湘南」とも呼ばれている。

平成 18 年 3 月に、飛び地ながらも大滝村と合併し、面積は約 444k m² となり、有珠山周辺など優れた自然環境を有している。今「北海道で一番住んでみたいまち」として、注目されている。



(伊達市役所入り口ロビー
市内特産品の紹介コーナー)

◇伊達ウェルシーランド構想について

少子高齢化が進む中で、高齢者が安心・安全に暮らせるまちづくりを進めるとともに、高齢者ニーズに応える新たな生活産業を創出し、働く人達の雇用を促進して、豊かで快適なまちづくりを目指す取り組みとして、平成14年1月に「伊達ウェルシーランド構想プロジェクト研究会」が官民協働により発足した。その



(挨拶をする下副議員ほか各議員)

後、事業の創出をより明確に打ち出すため、研究会を再編し、「豊かなまち創出協議会」が設立された。

具体的な取り組みとして、「伊達版安心ハウス認定制度」を制定し、良質な高齢者向け住宅を民間活力により普及促進することとしている。現在、2棟65戸が認定を受け供給されていると伺った。



(開発が進む、田園住宅団地)

次に、「伊達版優良田園住宅」の取り組みについては、多様な住環境の一環として、田園居住に対するニーズの高まるなか、平成10年に施行された「優良田園住宅の建設の促進に関する法律」を受け、市独自の基本方針を策定したものである。取り組みとしては、本年

10月より、市有地の農業センター跡地を活用した、民間開発による建設事業（田園せきない）がある。現地を視察したが、まだ造成中であり形も見えなかったが、53区画中、一週間ですでに19区画が販売されたと伺った。

次に「伊達版ライフモビリティサービス（乗合いタクシー）」については、高齢化が急速に進行しているなか、生活の足を確保するため、会員・予約制の乗合いタクシーを平成18年11月より導入されていた。対象は60歳以上でバス路線も運行するとの説明であったが、まだまだ利用者が少なく今後の拡大が課題とされていた。

厳しい財政状況のなかで、官民協働の取り組みは、浜田市においても、大いに参考にすべきものと感じた。

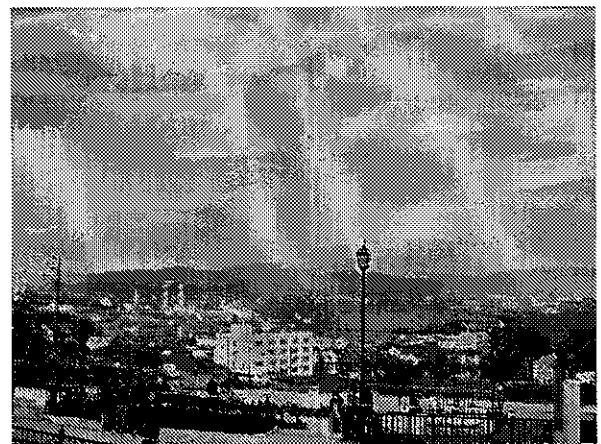
北海道函館市

◇市の概要について

函館市は人口約29万4000人。

北海道の南西部渡島半島に位置し、1859年、横浜・長崎とともに日本最初の貿易港として開かれて以来、早くから海外との交流が始まり、近代日本の幕開けの中でいち早く外国文化に触れ、

市民の中にも新進的な国際感覚が息づく、永い歴史と文化を有するまちである。



(高台から函館港を望む)

平成12年に特例市の指定を受けたほか、平成16年12月に、周辺の戸井町、恵山町、榎法華村、南茅部町と合併し、「海」を生かしたまちづくりを基本理念とし、「国際水産・海洋都市」の形成を図っていくとともに、特色ある観光資源を生かし、「国際観光都市」としてのさらなる発展を目指している。

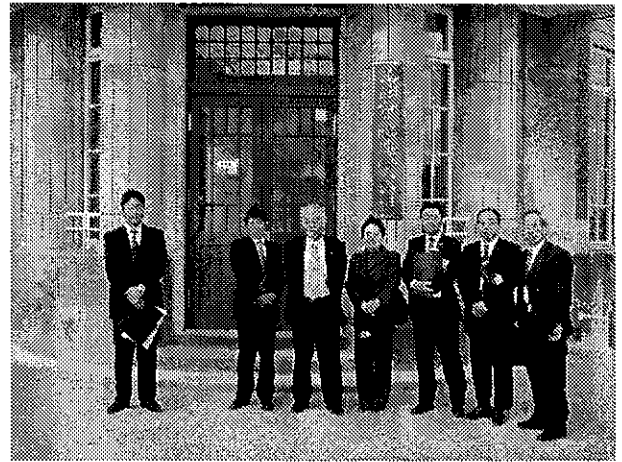
◇国際水産・海洋都市構想について

函館市は、津軽海峡に面していることから、北海道と東北地方を含む北太平洋と日本海を研究の対象海域とすることができることや、北海道

大学大学院水産科学研究院などの学術研究機関が数多く立地しているほか、調査船が長期間停泊できる重要港湾を完備しているなど、水産・海洋に関連する研究を高度化するうえで国内の他地域にはない環境が整っている。

そういった優位性をさらに伸ばすため、公的研究機関や民間企業の研究機

能を戦略的に集積し、地域企業などとの連携をより強め、水産・海洋に関するクラスターを創出する事や、市民一人ひとりの水産・海洋に関する意識を高めることにより「国際的な水産・海洋に関する学術研究拠点都市」の形成を目指し、もってマリンサイエンス研究分野での世界をリードする先端的で独創性の高い研究成果や社会経済を支える革新技術を開拓し、科学技術創造立国の実現に資するとともに、地域における産学官連携の強化による水産業の萌芽を促し、雇用の創出と産業・経済の活性化を目指すため、平成15年3月、この構想が立ち上がった。



(函館市臨海研究所前にて)



(説明をいただいた高所長さん)

5つの基本方針、4つの主要施策により、国への効果、地域への効果生み出すため様々な角度からアプローチし、新産業の創出、雇用の創出、産業・経済の活性化を図ってきた。

産官学連携強化による新産業の創出の一例として、函館市の文化遺産でありながら遊休化している建築物を、最先端の研究機関

に改造・改築し、民間企業に貸し出している事業がある。現在この研究機関に3社入居しており、水産業関連の研究を行っていた。開設以来空き室になることはなく、利用率が非常に高いとのことであった。入居者は全国から集められており、これには、市内大学関係者が大いにかかわっているとのこと。

市と学術研究機関の連携により、特許の取得（21件）や70品目もの水産関連製品の開発を実施しており、経済活性化に繋がっている。

観光面においても、学術研究機関が研究のために飼育している海洋生物や様々な標本、函館ならではのコンブやイカなどを市民や観光客に展示開放し、既存観光施設との連動化も図られている。

また、まちを歩けば水族館という癒し環境の創出を目指し、研究施設や商店、飲食店のウィンドウで海洋生物の展示（水槽の展示、CG、3次元立体視システムなど）をし、町の散策がそのまま海洋学習となる「まちかど水族館」として、函館市ならではの水族館の演出もされている。

水産業と大学、水産業と観光、地域と水産業など、様々な連携によりまちづくりそのものが活性化されていることを実感した。

我が浜田市も、漁港あり大学ありの環境を有しており、規模の違いはあるにせよ函館市のこの構想は非常に参考となる事例であり、今後のまちづくりに活かしていきたい。